



「アマゾン祭り」(ブラジル・ベレン)で行なわれたアニメーションのデモンストレーション風景(中央が筆者)。抽選で選ばれた現地参加者にアニメーションの動画に触れてもらった

よしだ はるゆき ● 成安造形大学デザイン科卒業。毎日アートスクール・デッサン講師を経て、1998年より代々木アニメーション学院講師。関西地方を中心に大手企業VTRおよびCM作品を多数制作。97年にNYADC賞、JAGDA賞を受賞

リレーエッセイ
海外派遣
専門家たより

南米のオタクたちは サムライLOVE!

ウルグアイ、ブラジルで
日本のアニメをレクチャーする

よしだ はるゆき
吉田治幸

代々木アニメーション学院アニメ学部長

「あなたはなぜサムライにならなれないのか」
ウルグアイでのレクチャーのときでした。会場にいた大学生の一人が、質問を投げかけてきました。こんなおもしろい質問は、日本にいてはそうそう出るものではありません。
どう答えるか、一瞬、改めてサムライと向き合う羽目になった私は、とりあえずこんな答えを搾り

出した。当時のサムライは公務員みたいなもの、イギリスでいうナイトのようなものなので、もし、いま日本政府が公務員としてサムライを職業と認めて給料をくれたら、ひよっとすると私もなっていたかもしれない。
質問をした大学生は、納得しつつ、笑みを浮かべてくれました。
このたび、2008年9月3日から17日にかけて、ウルグアイとブラジルの2カ国4都市で、日本のアニメーション文化に関するレクチャーとワークショップを開催してきました。海外の人たちから見れば、アニメをつくっている日本は、「サムライ」の国であり、最先端の「ハイテク技術」が発達し、「オタク」で「勤勉」な、そして「独特の伝統文化」を持つ国。どこか神秘性とおもしろみを感じて、人々が興味を抱いてくれているのではないかと思うのです。

別の店員に聞くと、「僕は『バガボンド』と『BLEACH』にはまっているんだ。意外だったのは、女性店員が「とてもかっこいいの」と挙げたのが『子連れ狼』だったこと。店頭には、『DEATH NOTE』や『だめカンタービレ』などの現代のものもありました

南米では、時代劇ベースのファンタジーや忍者モノに人気があります。ブラジリアの書店で売れ筋のマンガを質問したところ、「僕はとにかくこれが好きなんだよね」と、紹介してくれたのは『NARUTO』です。日本では『週刊少年ジャンプ』に連載されている人気の忍者モノのマンガで、近年はアニメ化されて、テレビでも大ヒットしています。その書店でも、単行本コミックが平積み。最新刊が出るたびに飛ぶように売れるため、店頭で品切れにならないよう、大量に仕入れられているそうです。レクチャーの会場でも、『NARUTO』に登場するキャラクターのコスチュームを着た来場者の姿がよく見られました。



UNICEUB大学（ブラジリア）の日本文化週間の一環として行なわれた講義。アニメ文化の紹介とアニメの撮影の構造、また実際の撮影素材を使った筆者の話に、学生たちは熱心に耳を傾けた

が、圧倒的に多かったのは、やはり日本刀や忍者、サムライといったイメージのマンガでした。時代劇や忍者を題材にしたアニメが、新旧の日本文化がうまく融合したソフトだと思つるとともに、アニメには日本文化に対するイメージを世界に植えつける力があるのだな、と感じた瞬間でもありました。

学

生たちとアニメの話をしていると、日本の最新のアニメに触れていることがわかります。しかし、レンタルビデオ店や販売されているDVDを見ると、そんなに種類が豊富ではありません。そこで、最新のアニメ事情を知っている参加者たちに、どのように情報を得ているのか聞いてみると、「ネット上の違法ダウンロードなどを含めた手段で視聴している」との回答でした。

違法ダウンロードをする理由には、「買いたいが、日本のDVDをどのように購入すればいいのか、わからない」「アニメのソフトは高い」ということがあります。きちんとしたDVDの販売ルートが、世界レベルで確立していないところ

に問題があるようです。輸出方法をもっと充実させることで、日本のアニメはさらに人気が出るのではないかと考えさせられました。

ア

ニメ制作はどうなのでしょう。ウルグアイではアニメ番組の制作が難しく、実際にはアートアニメの制作がほとんどだそうです。ブラジルでも、テレビアニメの制作は子ども向けの教育番組のものがほとんどで、衛星放送のアニメ専門チャンネルで見るとい

うのがポピュラーになっています。これは、両国と日本のアニメを取り巻く環境に違いがあるからでしょう。日本のアニメは、マンガという豊富な作品ストックを持っています。マンガはアニメ制作よりも安価に作品制作を行なえるとともに、多様な発表の場を持っています。これらを先行的に販売することで、ストーリー、ビジュアルともに広い認知を得ることができ

ます。つまり、メディアミックスの手法がとりやすいビジネスモデルを、日本は市場のなかにすでに持っているのです。

うなビジネスモデルがありません。南米地域、もしくはそのどこかの国で、このようなビジネスモデルを発生させることができれば、日本と同じようにアニメ文化を発展させることができると思います。また、発生させてほしいと思ふのです。

日本のアニメの制作技術やビジネスモデルを海外に向けて発信することは、良きライバルを出現させ、世界にアニメを浸透させるうえで非常に重要です。代々木アニメーション学院は、これまで日本のアニメ制作の人材育成を行なってきました。近年、当学院の門を叩く学生には、外国人が多くなっています。世界のどこかで、アニメを文化として自国で根づかせてみたいと考える人たちに、技術の伝授と、日本のアニメのすばらしさを伝えることは、新しいアニメ誕生につながることでしょう。

いつの日か、南米にアニメ制作の火が灯り、制作が始まるのを期待するとともに、日本の文化が、形を変えながら、さらに世界に浸透することを期待したいと思います。☺